

大垣市金生山化石館

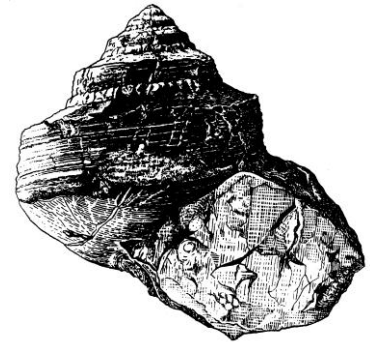
化石館だより

コラム

プレウロトマリア

金生山から産出する巻貝化石の一つに「プレウロトマリア」があります。大きく、姿形も良く、希産ですから化石収集家にはたまらなく魅力的な化石です。これは、早坂一郎によって1943年に前鰓亜綱（Prosobranchia）原始腹足目（Acheogastropoda）オキナエビス亜目（Pleurotomariina）オキナエビス科（Pleurotomariidae）に属するとして記載されました。

図：早坂一郎の論文より



プレウロトマリアが属するオキナエビス科には、「オキナエビス」という日本を代表する貝がいます。この貝は地質時代に大繁栄をしたグループの生き残りで、いわゆる「生きた化石」です。しかも、美しさ、珍しさ、学術的な貴重さなど、いずれも第一級です。



この貝には、殻口部分に「スリット」とよばれる細長い切れ込みが見られます。この切れ込みの下には、鰓や排出口、生殖口があるのですが、原始的な貝の特徴の一つで、アワビに見られる孔の列も形は違いますが同様のものです。

オキナエビス類は世界の温・熱帯域の水深100–500m付近に生息しており、現在までに世界の海洋から25種、日本周辺からは「オキナエビス」「ベニオキナエビス」「コシダカオキナエビス」「ゴトウオキナエビス」「リュウグウオキナエビス」「テラマチオキナエビス」「アケボノオキナエビス」の6種が知られています。これらの貝

は、その希少性と大ぶりで優雅な姿から、蒐集家にとって憧れの貝のひとつであり、日本近海に生息するリュウグウオキナエビスは、1960年代当時、1万ドル(360万円)の値段がつけられたこともあるそうです。オキナエビスは別名「長者貝」とも言いますが、それにはこんなエピソードが知られています。

明治 8 年(1876) お雇い外国人として東京大学の博物学教授をしていた ヒルゲンドルフ (ドイツ人) が江の島の土産物屋でこの貝を買い、持ち帰って調べたところ、古代の貝の特徴を良く保持していることがわかり、日本にオキナエビスという生きた化石が産すると学会に報告しました。すると、大英博物館から高額の懸賞金を付けて東京大学へ採集の依頼があり、三崎臨海実験所の採集人 青木熊吉さんが翌年の春生きた貝を採集し、大学から 40 円という当時としては大金の謝礼を受け取りました。その時、熊吉さんが「長者になった様な気がする。」と言ったことから、「長者貝」という別名がついたということです。

さて、金生山の「プレウロトマリア」ですが、この化石には中軸が明瞭に開いていない、殻が全体的に厚いなど、様々な問題点が指摘されてきました。しかも、オキナエビス科の出現はジュラ紀以降であって時代的にも一致しないのです。

この化石の所属は、研究の進展に伴い、1977 年に Hayami&Kase により「バスロトマリア」とされました。また、2012 年には Nutzel&Nakazawa が「ゾングスピラ」という属に移しています。

図：堀 雅一氏 標本



お知らせ



ヒメボタル観賞会

金生山のヒメボタルが見られる時期となりました。金生山自然文化苑保存会では、次のように観賞会を開催します。お出かけください。

6月 8日(土) 写真教室 デジタル一眼レフによる撮影入門 篠田通弘氏

6月15日(土) 二胡コンサート と 松本和芳氏による陸貝とホタルの解説

いずれも、午後 10 時から、山頂の明星輪寺で行われます。尚、協力金として一人 100 円が必要です。また、これ以外の日は、夜間境内に立ち入れませんのでご注意ください。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp